

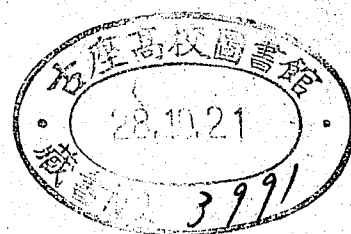
山本記

291
65

2
6

291
65
1

中根文庫
贈



○山本記所載人名抄 (無巻添)

上方湯	仙石権兵衛	湯川直壽	田上平冬史	湯川五郎
在桑久左門	横矢六郎	田上久太郎	鈴木刑部	
羽柴秀長	真所左司	玉置主殿之助	勝田三郎	
青木勘兵衛	日良隆雄守	深見新右門	朱川右五門	
膳室若右門	山本主膳	永福大史	後平左衛門	
峰浦康房左門	廣畑福吉門	原重右門	龍神三郎大史	
小寺新吾持守	三栖市之丞	坂重右門	玉置永直	
杉若勘後守	山本平助	笠松權大史		
片山三内	安宅左近	栗山三郎次郎		
服部市兵衛	無代左近之丞	田畑六太夫		
桐野孫作	曾而部	秋田大郎左門		
藤堂主殿	鈴木左衛門	小初間左近		
中島吉郎大史	笠松主助	林興庫		
丹左三太夫	田上右衛門之助	急吉近之丞		
根末	深見又之助	玉井新兵衛		
片山智明院	田上五郎大史	平井掃部		
	真所左司七郎	加藤大膳		
	田上由元史	津打		
	玉置同老之助	高垣		
	田上吉三郎	石山		
	田上吉太郎	山本權之助		

山本記目錄（點畫法）

岩田川原、今春より幸福頭下川引成就

塩見峠、合戦ヨリ上軍別場ニテ

自春康忠等殊毅やうん

豫川山李，
豫竟泊城，
及

田上由元玉堂圖書

山本宗鑑所

山平系圖

龍松城

山本云所領

古城記

資料
番号

03991

此後之化驗家ヲニ卷ヲ六号 吉野朝ト記外山本家ニ補志ト述ル
其事、山下式ハ源氏ニ依リ源氏等 近江守トシテ外山本家ニ依リ
同テ式トテ源氏ハ源氏等 近江守トシテ外山本家ニ依リ
本家ニ依リ大坂家源下ニ忠勤ヲ励ミル等、其事アリ

山本記

若田川原、合戦ヨリ主膳頭下川川ハ就マシ
天正十二年多豐臣方吉ヨリ仙石権兵衛、左藤久右衛門尉
ヲ田辺ニ言訕シ、湯川、山本目代ノ家族、使テ出頭シ使テ山
本家ニ依リ、重臣ヲ名代トシ、出テ大演シ、然レテ人々見テ、早速
出仕可仕旨約束シ、西使ハ直ニ引返シテ、然レテ山本、湯川
其地豪族共相約スル事アリ、一致、行動カテ取リテ、故郷ニ時日
モ近延シテ出仕セ、遂ニ其年ニ暮ケテ、吉吉大ニ怒リ、明モ
十三年三月羽柴秀長ヲ大將トシテ、仙石権兵衛、青木勘
兵衛、左藤久右衛門、藤堂與古正門、吟須貞多古正門、
吉野義精等、杉本越後守ヲ部將トシテ數万騎ヲ率テ、
紀伊ニ東攻シ、先ニ振末寺ヲ焼キ討テ、尋テ大田城ヲ木攻メ、

直春退去
三ヶ

トシ、日前因是社ヲ破壊シ明王寺ヲ焼布シ、尋テ因中
ヲ掃蕩セリ。

四月七日、仙石、藤、藤堂、峰須賀、宇野、青木、杉若シ
ヲ木陸ヨリ熊野ヲ征セリ。諸將進シ田辺陣シ四方ノ
神社、佛閣ヲ焼掃シ、人ニ生ナキ地ニセリ。此ノ戦キ
所石屋ヲ望ニシ帰帳セリ。独リ湯川直春、日高新ハ松
尾村丸山城ニアリテ居セリ。士氣ノ勵ミ云々、杉家ハ武田
源氏ヲ滅ス。杉ノ至リテ十三代末々ノ事ヲ云々、杉家ハ武田
ノ今一戦ヲ試ミス。降ケ、宣ミ末代ノ恥辱ヲ云々。ト藤
代、甚歎、藤ノ瀕ノ諸將ニ檄リ防戦セリ。然レ其防
備未タ疎ナリ。杉家ハ大軍既ニ殺到ス。直春等々甚
ナリ。近衛村ノ横矢太郎頼リ、向真砦を司サトモ

カシ合セ湖身峠ノ嶺ヲ據リテ敵ヲ待ツ。此地略シテ防戦嚴
ナリ。杉長郎軍ヲ分テ仙石、藤、藤堂ノ諸將ハ千五百
騎ヲ以テ之ヲ攻メリ。

此時ニ方リ、目良義隆守千兵ヲ以テ秋津川中津城ニ防戦シ、
一方山本主膳頭ハ市ノ瀬城ニ據リ上軍ヲ抗セリ。杉家ハ又
熊野、宇野、杉若等一千五百騎ヲ以テ市ノ瀬ヲ襲フ。杉
若越後寺大見臣片山三内ヲ以テ又内谷ニ陣ヲ布カシ市
ノ瀬城ヲ援テリ。一日午後、馬ノ騎馬斗者一騎ハ差錯シ
ルヲ、山本家ノ臣廣福右エ門之ヲ斬リ、又次ノ日、告行ハ本
條一人来リタリ。三柳市ニ至リテ討取リス。杉若越後寺大
見、四月晦日進シ、名田村ニ至リテ陣ヲ構ヘ、上岩見ヲ押
出テ、常ノ市ノ瀬ヲ越テ城ニ迫ラント。此方逸早く大芝ノ市

三瀬村ニ出張リ川ヲ隔テ、上軍ト對陣ス。此頃富田川ハ數
日來、降雨ニテ濁水岸ニ漲リ居リ、上軍ハ氣ツカニ敢テ越
エ来ラス、双方両岸ヨリ鎗砲、弓ヲ放テ合フミナリキ。此時我軍
ヨリ熊代左近ニ告、岸ニミテ呼シ曰ク

此川サシテ深川ニモアラス、川水岸ヲ洗フトモ何事カアランイガ立
真先ニ瀬踏セン

ト黒毛ノ馬ニ打乗リ、鐵威、鎧着テ、堂ニト押渡リ、敵前ニ突進
シタリケル。續クテ背而部、鈴木友吉門（吉右衛門ト云セシ者モ
アリ）並ニ松島（此ハ天トセルモアリ）其他ノ面ニ我軍ヲト押渡
リス。此時熊代左近ニ告一トモ、大音ヲ揚ケテ叫ンテ曰ク

我主山本赤忠ハ存念ノ上、君等公ニ從ハス、任令今ハ勝
テタリトモ、運ヲ同ヤントモ思ハス、人命ヲ重キ、任令今ハ勝

合戦シテ名ヲ残サン許リテ、我ト思ハシモ、ハカリ申ス熊代
左近ト知シテ熊代左近ノ手ノ内ヲ見ルニシ

ト、此時ニニ應シテ、青手ノ内ヨリ井尻ニた天ト名乗リ、立リ出シ
タレシ熊代見カケテ、渡リ合フ間モアラセテ、井尻ノ馬諸共、引寄
セ一カノ下ニ首掻切り、之ヲ高ニト差揚ゲ

此獲首取ツテ何カセシ

トテカシク、笑ヒ敵中ニト投ゲ込ミタリ、青手ニ之ヲ見テ大ニ怒リ
ハ本勢一騎ニ球ヲテ討来レト、因ニ上ケテ互ニ追ヒツツ、追ヒ
ケル。田上右衛門助ハ、青手ニ、勇士服部市兵衛ト知り、結フ間ニナシ、
市兵衛ハ、首ヲ打落シ、深見又た即ハ、桐野原作ト名乗リ、強者
ト稱テ合セケルカ之レ又須臾ニシテ、川端ニたテ、孫作ヲ突伏セ討取
リヌ。

田上、真砂
一騎死

既ニシテ山本勢、於一騎當千ト頼ミ、田上五郎太夫、身於
次郎七郎並チ力ニ乗シ、余、深入シテ其國ニ達シ、討死ス。
我軍、後ニ又川ヲ相シ、所謂脊水ノ陣ヲ布キ、一歩モ退カス者
ヲ先途ト戦ヒケリ。上軍、追ハレカ、ヲ増シ、攻メカケ、ル間、味方ニ苦
戦、限リテ盡テ所相、後ニ伏セ置キ、ル百姓、是輕、一隊、中急
ヲ見シ、山手ノ方ニ急カシ、木居物居ヨリ一奇ニ鉄砲ヲ放
タケレ、上奇手、其調漸ク崩レ、敵多シト見シカ、其時ニシト
死傷ヲ見、棄テ、ニ去テ、引返シ、大川迄、陣ヲ固メケル。
中一隊、奇手、死傷夥シク、味方ニ於テモ田上五郎太夫、身
於次郎七郎並チ是輕、一人、都合ニ人討タレケリ。
五郎太夫、何カ仔細アリ、カ、前夜ヨリ甲ノ緒結ヒ、切リ、討死ス、
其體ヲ示シケルカ、其如ク大勢ヲ斬リ、ヤタル上討死セリ。

栗浦リ返
陣

上ノ方、田上、
退カ

其後、奇手ハ次第ニ増石ノ様子カ、引、主膳頭、栗栖
川四番ニ引籠リ、麦粉峯ニ本ヲ構メ、敵ヲ一騎打ニ難所
ニ誘ヒ込ミトス。然レ、其地場所餘ニ、狭シ、傷カキ自由ヲ有セ
下川村、引移リケリ。奇手ニテ、後ヲ追カ、果シテ山本勢
ハ鍛冶屋川、現場ヲ引ハレ、敵ヲ待テ受ケタリ。山本平助
(兵令トス)態代、深見、小野村、沢村、野山、引籠リ、鉄砲
ヲ打チカケ、敵兵、近ツケス。討タレ、者多シ、勝目ハ、キシテ
ミタシ、其ノシト思ヒケ、遂ニ田上ヲサレテ、引返レケル。

其見、峠ノ合戦ヨリ上軍、引揚ツ。
左ノ程、別一軍、仙石、榊原、尾藤、久古、五、ハ、藤堂、其古、五、門、等
十五百騎ヲ率テ、五月朔日、近江村ニ、湯川、横矢ヲ攻メ、落
シトス。其間、湯川、直春、増々大郎、貞新、庄司、及、女宅

左近トカヲ合セ、並見峠に出依リ陣ヲ敷キ居リシ、奇チ之
ヲ見テ、ハカク其ヲ迎テ湯川、何程カアタリ並見峠ノ坂ヲ
上ケテ登リ来リ。湯川方ニ田畑太夫、駄田大島衛門、ヤチ岡
左近、杯兵衛等々先ヲ務メテ射撃セハ、何レ一本モヤリ、見エ
是程百姓不降ノ、忍テ奇リ、石銃砲ヲ乱射シテ、皆其的ヲ射
ルヨリ易ク、瞬ク内ニ死傷山ヲ築キ、驚テ所ニ奔テ逃ス、進
メ者トモト下知ラレハ、集テ左馬之丞、玉井新兵衛、守井掃部、
加藤更藏、津村、吉垣、八山等一度ニドツト追下シ、指詰メ射
下シテ、空矢一モナク、所ニ數百名ヲ討テ、其ノ後、我
先キ逃下リ、田畑、守井引退シケル。湯川方ニ於テ、田中重忠、大
但馬是、當業ノ士討シケリ。

栗山、山本、湯川方ハハカクナレトモ、地ノ理、明ルシ山野ヲ自内

ニ馳驅出發シ、ハカクシテ戦フ故、其度毎ニ勝タルハナ。其時
ハ多勢ナレトモ、地理不案内ニテハナク、施シ様モナク、攻メアグニ兩軍
對峙スレド數十日、七月中旬ニ至リ、東早苗集ヲキテ和議ノ申出
テアリ。兩家トモ所領安堵ハ沙汰追テ、ハカク置キ、杉君討
後宇ヲ泊城ヲ上テ置キ、全軍都ヲサレテ引揚ケケルコト決止ナレ。
其後山本主膳頭ハ其儘下リ村ニ引退リ、湯川直春ハ亦田畑
ニヤシ、公事居テ、何レモ家中面々、一先ハ暇ヲ賜リ時ニ至ルヲ待ツコト
ヤリ。

直春、康忠等謀殺セラル

天正十四年、甲午二月、秀吉ヨリ、藤堂佐渡守

在文書ハ、多ク、和泉守トモ
ハ、誤リ、和泉守トモ

ヲ田畑、二書封サレ、湯川及山本、公事居、使レテ云ハシ

何レモ本領安堵トテ、キニ付大和郡山城、参ルコト

浪々身ニシテ
兵糧ヲ喰シ
不ト解ス
和洋ノ調ハ
外通ナリ

巧藝ノ伴
直春等ノ事
ニ詳ナリ

ト、爰ニ直春譜代恩顧、即意共喜悦、思フモ、爰カシヨ
リ馳集ル者其數三百餘人、主君直春ヲ御供シテ和外部山ノ相上
リ各ニ所産ノ物ヲ寄シ、其沙汰ヲ待テ居タリケリ。直春今ハ浪々
身ニシテ是等ノ物ヲ食ス、兵糧ヲ喰ス、クモアラハ、各自飯米持テ
ニ相詰メ、主家女將ヲ令ケ、ト待テ候ヒケリ。其内ニ飯米ヲ盡キ、且
ニ暇アタケニ帰田スルモノ多カリキ。
サレ程ニ熊野ヲ出テ時ニ百餘人ト同シケリ、今ハ早ヤ残リケ
ニ元々角ト行末ハ細シゾ、思ハル所柄、七月十六日、夜ノ食事ニ
幕調合セラレ、遂ニ直春主從十數人アハナキ最後ヲ遂ケニケ
リ
此方山本方ハ、藤堂佐渡ヲ使テ、赤松公家臣ノ集メテ評
議、未覚悟アリノ部ハ、参ルツト、藤堂佐渡守下川村ハ赤

忠公ノ幕居ヲ訪レ、同道ニテ出奔セリ。此時直春ノ幕ハ、多人数ニテハ
穩便ナラシ重テシテ、少人数同伴セラレヨリアリケル。家臣十数人アリキ
具シ、田上由元者、玉置必書者、其他ニ市ノ渡城ヲササセ置キ、日
ヲ經テ新山城下ニ到着シ、直春ト同シ旅人者、皆、拜謁シ沙汰
ヲ待テ暮ス、トシ月餘、何ノ沙汰モナシ不安心カレ居ル矢先キ、セ
月十六日、夜直春主從皆盡言サレテト同キ、愈ニ謀ラレテリ馳
ハ、赤松公ニ其害ハ及ムコト必ヤ、幕ロ帰田セント相決シ、一通
書置キ、城中ノ面々置キ、七月二十二日朝部山ヲ發シテ帰田
ニ決シ、ツキシリキ
「書置ハ文面」
我レ市ノ渡城ヲ玉置國主ニ預ケ置キ、夫ノ地ニ諸レフトモ
トナク存スル故一先ハ歸下リ又追々改メテ上リ申サシニ

昨日セツ道ヲ紀和ノ園境峠ノ城ハ人ヲ待乳峠ノコトニ其當時一時藤
 堂佐渡守ノ居城ナリノ前ヲ通過セントスルヤ、藤堂守一配ヲナシテ心符ヲ
 ル佐渡守、イカガ無事ニハ露ヲ道ナリキ。即チ山本主従ヲ待テ受ケ
 懸ヒセカ館、一泊ヲ勸ム、此方今更卑怯ノ振舞、モ出シ難ク、情
 セル、カ儘ヲ随ヒヌ。日ノ暮京之助ノ懸代左近ニ至リ、佐渡守
 ノ伯父主殿ト申仁、銘ノ泊リ、其地田上主ニ至、同基左近、同
 平太夫、同久太郎、玉置主殿ニ合、同多中郎、深見又左郎、
 同新右工門、森脇太夫、原四郎右工門、堀重右工門、笠松權
 太夫等、主名康忠ト共ニ本陣ニ入リ、イト町重ヲ領養應ヲ
 受ケ先々、康忠公ノ弟ト、導キテカ、カリスン處、新山ヨリ、追
 手ニ来リ、佐渡守ノ内通ニ、二重ニ重、活室ヲ取圍ニ、同ノ声ヲ
 上テ、四方ノ聲ヲ、數倍ノ倍先ヲ新込ニヌ。康忠ハ様ヲ見テ

湯川記ニ寄リ
 治イキレト
 守丹毛ノ詞
 一月四日
 順ヲ切ラサレ
 足利公ニシテ
 守丹毛ノ詞
 (後略)

京早是レ述ナリト覺悟ヲ極メ、矢庭、切腹シテ相果テタリナリ
 享年ニ十五歳トイフ。此ノ事ヲ同ノ書ニ、増々、ハ佐渡守
 ナリイザ討捕リ吳レント。眞ノ向ナレテ、切リ込ニナリ、此時佐渡守
 ニ、藤堂守一、高島忠房、森脇太夫、堀重右工門、笠松權太夫
 討セシト、斯合相討ツコト、半時餘ニテ討手ノ者ニ、十六人ノ切リ
 伏セ多勢ニテ、守一、高島忠房、森脇太夫、堀重右工門、笠松權太夫
 中ニ、無事左近ニ至リ、主殿方ニ、十三人ヲ斬殺シタル上、自刃
 ス。田上主殿モ亦、本陣ニ、テリテ、亦十三人ヲ斬リ、伏セタル後、藤堂守一
 カ、ランヨリハト、懸ニトレシ、城ノ裏手ナルト、上リ、自刃シテ相果
 テナリ
 田上主殿之助、所存マアリシカ、此處ヲ切腹セテ、活ナリキナリ、深
 見又太郎モ同シ、切腹セテ、活ナリキナリ、活ナリキナリ、活ナリキナリ

追手、追詰メラレ、遂ニ翌二十三日、未明お承ヲレタリ。
右京ハ晝ニ山ニ伏シ夜ハ野山ノ道ヲ走リ二十四日ノ朝詠書城下
ノ歸リ着キ、郡山コト峠ノ交難ヲ委シシ長ケレハ、皆ニ無念ノ涙
ニシレタリ。早速湯川方、栗山ニ昇次郎ヲ通シテ之ヲ知ラセ、共ニ
亡君ノ恨ミヲ晴ラセ事ニ極メ決セリ。
湯川部ニ右京ヲ誘右京ハ作リ峠ノ城ヲ切抜ケ歸リ、郡山ニ直
ニ着キ、峠ニテ原出解救ノ有様ヲ語ルニトアレモニレハ
詠書ト
湯右京ハ湯川部ニ行ハ一人トシテ直着、行方ハ随ヒシラン
モ、他家ノ一行ニ在リ峠城ニ来リタリト思ハレテ、昔者ハ田
上右京ト誘右京トテ混同シタルモノナラン。
湯川、山本ノ残党泊城ヲ攻ム

湯川部ニ昇次郎

湯川部ニ栗山ニ昇次郎、山本家ヲ山本権ニ至名代トシテ
相諮リ、両家ノ残士ヲカキ集メ、詔方ニ百餘騎山本新官
（権ニ至）ヲ大將トシテ七日、略日、泊ノ城、押寄セリ。城主杉
五郎、城守ニ在リモカハ不時ノ備トシテ、牛頭頭ノ浪人共ヲ集
メ、孫ノ根米、浪人五右京、片山智明院某ナル勇士ヲ召抱ニ居
レリ。折柄大勢攻メ来ト見レバ、原右京等々、奮ニ出テ大
声ニ呼ハシ、日、若シ方如何ナル仔細ナリハ、奇ヤ来リ給フゾ。
城守、向フ事ハ、精細ノ弁名ベシ。石陰ヲハツテ、速ニ降
参セヨト申レハ、奇ニ、方より湯川五郎（湯川部ニ大將ト
ロリ）馬ヲ進メテ曰シ
我ハ馬矢ヲ以テ勝負セシコソ本意ナレ、何ヲ以テ善書詠書ナ
用ルテ湯川、山本ヲ殺レルカ、前代未聞・奇怪哉士タルニ

ノナニキ所業ニ非ズ君辱ラレハ臣死ストカヤ我輩ノ承
レテ何カセシ君を身代リニ越後ヲ討取ラセ君ノ恨ヲ晴
カン事ナリ

ト言ヒモ果テズ、山本權之丞先ニ立テ、鈴木利部、勝田三郎、
糸川玄正門、榎本治部、丸山主木 攻ムリ、一時破ラレテ死ス
ト、鉄砲ヲ射レシガケル。

原を東ニ、栗山三郎治郎ト接シ合ヒ、シバレカ同様ニ合ヒケルガ、
栗山遂ニ討タレケリ。此に基キ之ヲ見テ又、始リ、岩手ヲ上リ
右京ニ渡リ合フテト半時難ナク右京ヲ攻メ殺シケリ。片山智明
院ハ又龍神ニ即タヌ事ナシ止メケレ

榎モキレシ攻メ立テケリ。折柄越後守、四方ノ軍見物セント
又往同トリ見ル所ヲ越後ニ即タヌ事ト射殺タラシ又難シス

テ手ノ眼ヲ射貫キケリ。此時越中ヨリ中島吉良太又ト名乗リ
出テ丸山主木ト鉄ヲ合セシルカ、丸山ノ為ニ馬ヲ寄テ殺サレ、アハヤ
首カ、レントル。雲ハ、越後ドット押出シ、中島おセシトハカヨリお
柳ル。牛方ヤサキヲリモ丸山ウタセジト寄テ殺シ、如ク一度ニお寄セ
攻メケレハ、主木モ死ス命助カリタリ。

カレ程ニ越後守タリ系ル城内、ト引退キ、又テノ打チアツ防ナ
ケレハ、手ヲハ城ヲ取リ、鐵砲ヲ懸ケ今宵、中ニ攻メ落ラン
トモミニモンデバ攻メケル。カレ雲ハ、日ノ暮レ方ヨリ、一矢無シカ
キシモリ、雷雨烈シク海上怒濤ノ如ク、天地震動セレカ、越後
味方モ戦キメキ、ハ、遂レド、雷雨ヲ防カンテタメモナシ、何レモ
軍ヲ引イテ陣屋ニ退キケル

越後守ハ其後越後守ヲ四ノ備ヲ設ケレハ、手ヲモオツカ

う方最、皆散々、ナリ、引返キ又、

田上由元、玉置圖書殺サレ

泊城攻撃、後湯川山本、跡共、四方、散散シ、中、湯浪
ニ身トナリ、極ニモルモナリ、又、田上ヲ棄テ、衆ニ帰シ、工ニ持
ルモ、ナリ、メシ身ヲ潜メ、自決、安全ヲ計レリ

田上由元之助、市所及一子、同燔ヲ獲リ、一時市之瀬江
川、眞ノ思害ニ潜メ、居タルモ又逃レテ、周々見付有テ、其ニ
潜レ

一説ニ、赤忠、遺子一男ニ女アリ、其男長シテ、越前守ヲ相考
赤歸ニ仕、山本作兵衛トシテ人良、孫ニ千石ヲ食ミ、其子
孫人ヲ、孫升市ニ住居セリト

又、田上由元（右記ニ由元）ハ、法親、身ニ在リ、玉置圖書

書ニ助、日守郡和佐、城主玉置永直、其男ニシテ、赤忠
ノ弟ニ、母方、伯父ニ、其、赤忠若年、時家中騒動アリ、
暫時後見役トシテ差越レタル仁ニシテ、永直ハ、其、赤忠
降リタル同僚ヨリ、其害、及ハサルニト思ヒ、家中面ニ離散、
後二人ニシテ市ノ邊ニ居リ、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、
翌三十五年秋（十一月）赤忠、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、
根来、福源院法師ノ諸君有テ八騎ニ、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、
死セラレタリ

赤忠ヲ知南ニ於テ、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、
リ、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、
ニ帰シ、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、
其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、其、赤忠方、

守受テ、表空津路左衛門之生年妻、代官トナルヤ、杉若
勘後守、追放ヤル、ニ至リ、皆耳石佳、也、後守ニ
各自、産ノ限、生ヲ安シタルニ至レリ

山本家ノ墓所

西牟婁郡市ノ濱村元祇松城山麓一乗院大師堂ニ
山本家十四世、祖父ニシテ市ノ濱ノ城主トシテ幕府公以下
三代ノ世ニ至リ

義隆公 廣信公 忠朝公 ノ墓、五輪塔

康忠公石碑ニシテ

法多 一乗寺殿古因清義大居士

享和二年正月十五日丁未九月二十二日トアリ、ニシテ、

初三年本墓也、時、年号ナラン

石碑、天保年間田上吉良之島四代、孫吉良右五
門法正、建カセレモ、ナリ

山本氏ノ墓

天田判官義清 新羅三郎ノ二男市田近江

九代ニ至リ

十代山本判官忠雄

柳公ニ属ス、後四代中納言、新橋トモ

十一代 右京之亮忠孝

享和四年細川氏春ノ上馬、小次郎ニ戦ヒ、斃シ、之ヲ返シ、
新首正ノ名號トシテ、

十二代 陸奥守忠義

明徳二年南帝ノ京ニ召テ、

十三代 新官忠豊

十四代 左門太夫新廣

天保三年島山松氏ノ任、就テ、湯川五郎ニ氏、
世乳ヲ育シ、三ノ孫

十五代 瑞部之介忠朝

永祿三年回島山松ノ属シ、三好ト稱シ、
吉川氏ハ、助シ、(中略)

十六代 主膳頭康忠

大坂横川村築
徳島市村築
徳島市山形築
徳島市山形築
徳島市山形築
徳島市山形築
徳島市山形築
徳島市山形築
徳島市山形築
徳島市山形築

子

因幡

(一部、徳島市村築、徳島市山形築、徳島市山形築、徳島市山形築、徳島市山形築、徳島市山形築、徳島市山形築、徳島市山形築、徳島市山形築、徳島市山形築)

山本氏、生ノ家臣

徳川氏老 田上吉良三郎 屋敷市清 子ノ老

実老 田上吉良三郎 合 徳川、在老

合 無代左近三郎 合 市清 上平房

合 玉置吉良三郎 合 合 吉良

山本兵部、今 岩日城

山本格三郎 生馬城

玉置吉良三郎 合 徳下

田上吉良三郎 合 徳川

井洞清助 合 同

山本 太郎 堅田城

内川平兵衛

内川城

富田、徳ノ家臣、子ノ

楠本太郎

楠本城

新松城

天正年間治部少輔山本忠朝三ノ家臣

天正十三年、若城

市之浦村、在

城、横松

本丸長四間 横三十一間

二ノ丸長十間 横五間、三ノ間

南表より西北、廻廊横より南、長十間、横十間、横十間、横十間

一ノ丸、長

山ノ腰、武者溜より二十四方ノ煙

三ノ丸、長
横本丸ノ家臣
山本兵部、今
山本格三郎
山本兵部、今
山本格三郎
山本兵部、今
山本格三郎
山本兵部、今
山本格三郎

ニ九丈ニ詠松トシ志松トリ地ヲ放タスト一丈許リ東方ノ樓
遠ヲナシ同山ヲ詠ノ如シ卷巻ケテ門ノ「村木ノ如シ見エ
詠松ノ名ニ依テ起ル云

ニ壇南ハ升アリ又馬登レハ大升アリ行レモ常ニ滾々ト
シテ木ヲ洗フ

上東へ葦ニタル者カゲニテ葦の脇に一騎あり、難所々々ニ據て、
 東西、葦より表ニ方々深キ泥田、前ハ大川ナリ、城ノ周
 圍ハ大樹生ヒ茂リ、東葦原四丁程ハ又竹藪ナリ、右ニ高
 佐敷ト云々時ハ竹ヲ断テ伐リ、其株ヲ焼キ突ラシ、又
 大木ヲ伐リテ從橋ニ倒シ置カ、人馬ヲ容易ク攻メ攀
 ルコト困難ナキ要害トナルナリ

以上各項：昭和四年田上憲一氏
大坂府豐後新豐中
大字山上一
著

松城、田上氏、一、按鉦、ナリ、山井氏、記述、と、群精ナルヲ以テ、
シテ山井記トシテ、湯川記ニ對ス、中根、顯、景

山本氏所領

何年續命士

胡素七公同訂

山西田村、高峯村、田無村、岡村、市邊村、鮎川村、十川谷村

高田村 十四箇村

栗林莊

北郡 西谷 真砂 石井 芒 鍛冶所 臨川
成井川 小杉系 寸原 中條 稻葉 長生

心齋

田
辺

蕭子

日高郡、佐屋村、新原村、等

一、溪村

右所分川向北為通溝五丁

是より本主様より十一ヶ年以前
 行所 朝来知 寄田知 三番 四番より内田辺知より内
 清村 張子 濱村 万巻村 日吉 郡より内 塩釜よりわきまでが
 知行いたしき由申仰り

岩田村

在所分南甯道法四下

是、山本至後正家、山本各部、十二年以前、近居城、中
申、傷才兵部、岩田村、一、渡村、内、岡村、内、知行、いた

一 地ハミナノ城古跡跡 山城

生馬村

在所ハ辰巳前正法二十丁

是ハ山本主様正家及山本才部居城ニ由リ傳ヒ
退轉ニ年曆知不申カカ武部知行所ハ生馬村外
日高郡南ノ鹽屋ニ由リ承申ス

一 鴻巣古跡跡

山城

保良村

在所ハ辰巳前正法二十丁

是ハ山本家中内膳平名及ハ十一丁以前並居城
し由承リ及ヒ保良村内ノ川村知行致ス由

一 要害下城跡

堅田村

在所中ノ御堂也

是ハ山本主様正家中堅田才部百丁以前並居城ニ由

一 龍ノ口古跡跡

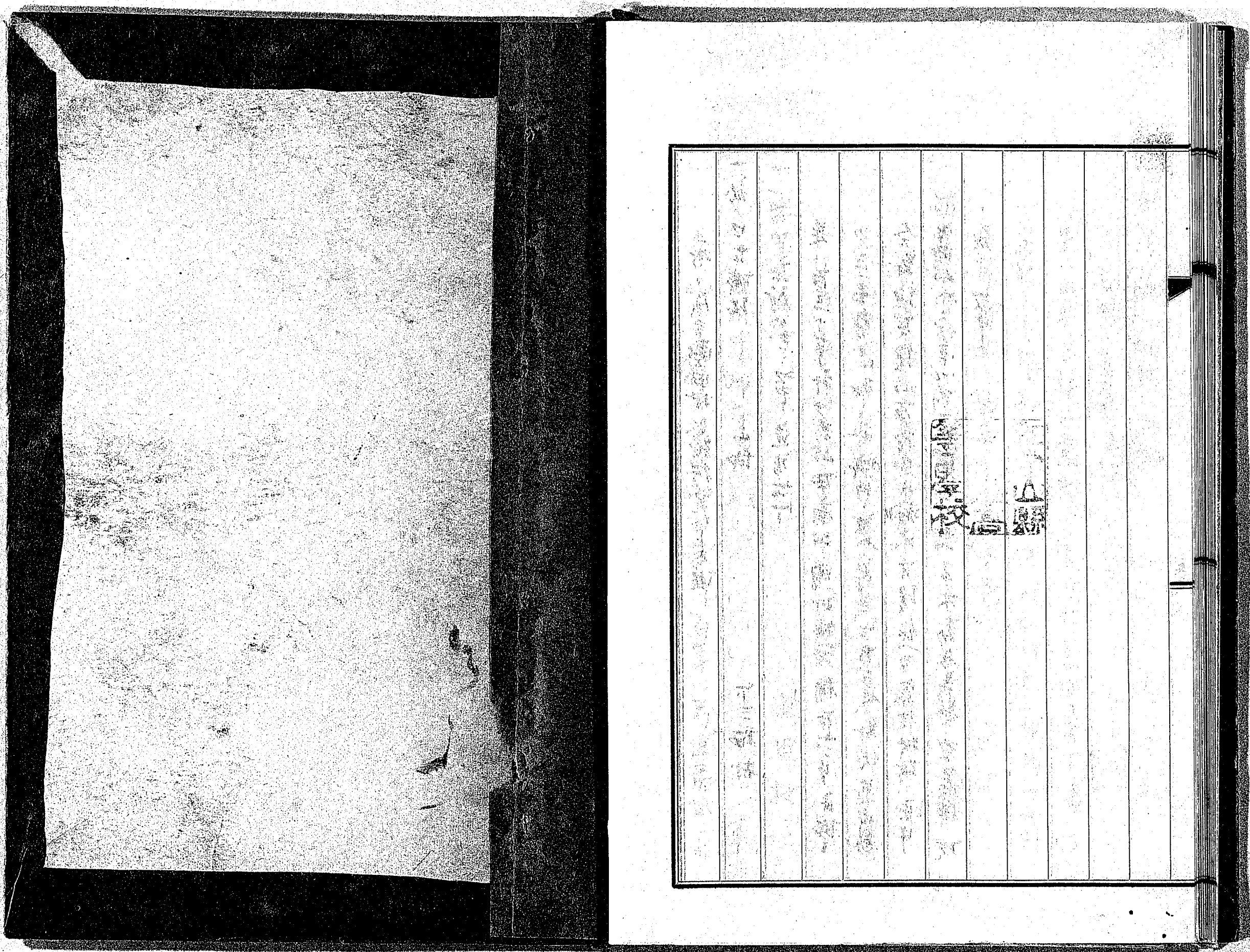
山城

下三栖村

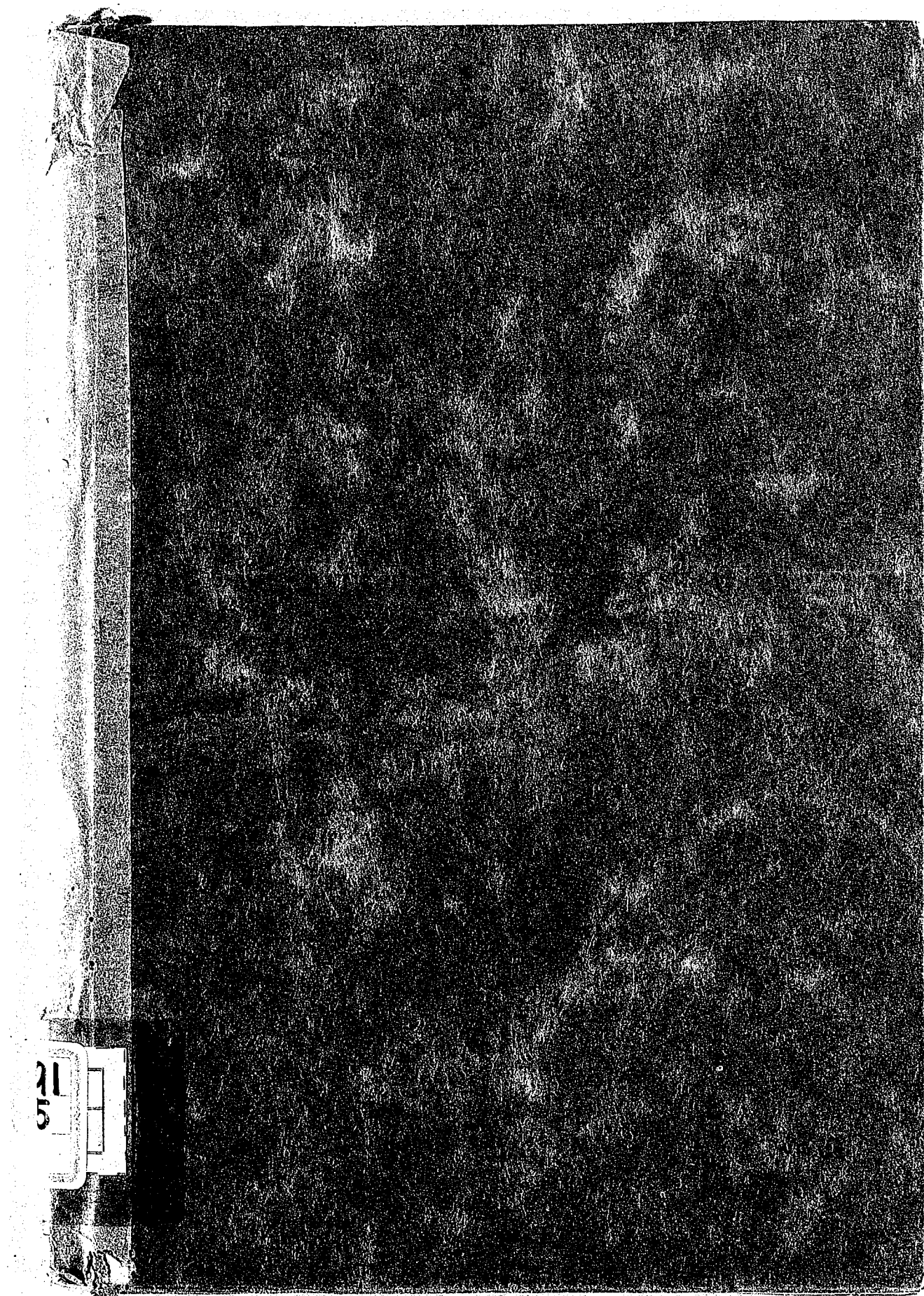
承リ及ヒ堅田村を知行いたレヌ由

在所ハ辰巳前正法二十丁

是ハ百五十年以前山本康子岡村地頭楠氏六郎居城
由三系勝一戰ノ付城内ニ入難各七人射伏申由其
合戦終其後山本抱分ノ難又其後能成衆徒次城ニ居申
之時ハ十二年前以前至其古跡古木動各事ノ功若狹攻
ノ所一被申也



Handwritten Japanese text in a cursive style (sōsho) on a ruled page. The text is organized into vertical columns. A red square seal is visible on the right side of the page, and a red circular seal is visible on the left side of the page.



21
5